

13

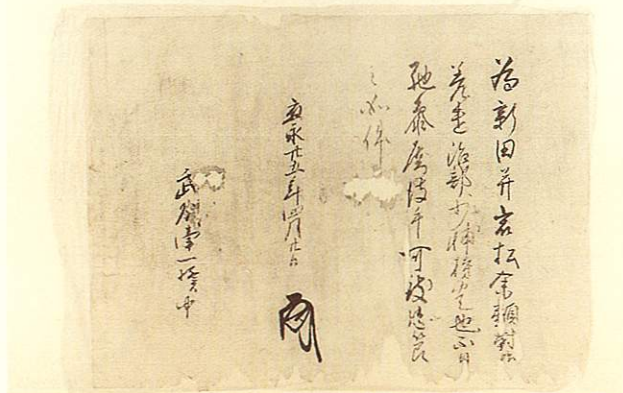
東国の動乱

■武士がつくる地域集団

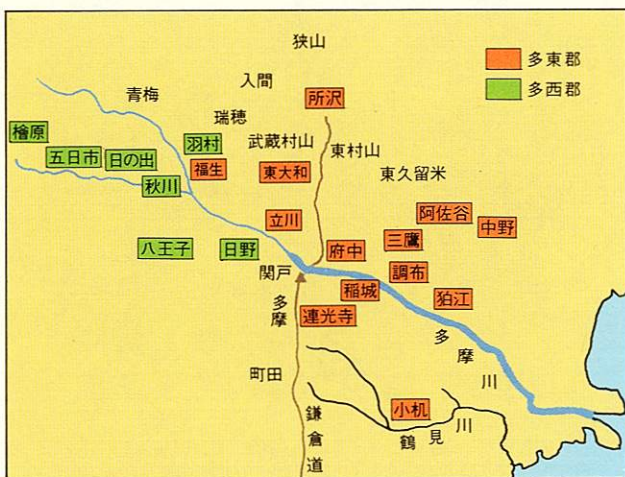
足利持氏が第四代鎌倉公方となった一五世紀初頭から、関東地方では一四一六年（応永二十三）の禪

秀の乱、三八年（永享十）の永享の乱、翌三九年（永享十一）の結城合戦など、戦乱が繰り返されるようになった。このようななかで、多摩地方では武州南一揆という勢力が結成された。武州南一揆は、中小の地方武士層が地域集団を結成したもので、一般に国人一揆とよばれる。南北朝時代から戦国時代にかけては「一揆の時代」といわれるほど、全国各地でさまざまな一揆が結成された。一揆のメンバーは、中心となる者がいても上下の関係はなく、平等を原則としていた。

武州南一揆は秋川流域周辺を勢力基盤としており、応永年間（一三九四～一四二七年）に活躍の跡がみられる。その中心をなしたと思われるのは小宮氏である。小宮氏も秋川流域周辺を勢力圏としていた国人であり、『吾妻鏡』に小宮氏の名がみえ、源頼朝や藤原頼経に仕え、御家人としての務めを果たしたという記録がある。しかし室町時代になると、その行動の記録はみられなくなる。おそらく武州南一揆の中心として活躍しており、単独で行動することはなかつ



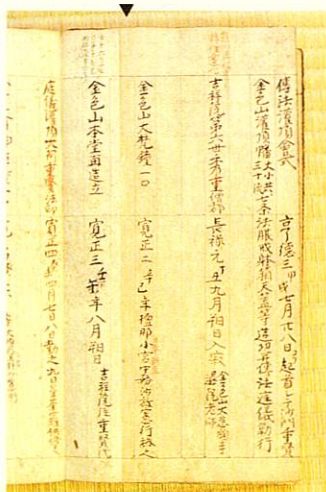
足利持氏御教書写（三島神社〔あきる野市〕所蔵 1418年〔応永25〕4月28日）
武州南一揆は鎌倉公方足利持氏より、新田、岩松両氏の残党退治のため、一色持定に属すことを命ぜられる。



多東郡多西郡現行地名比定図 武蔵国多摩郡は11世紀から12世紀にかけて西と東に分割され、中世さらに近世中期まで多東、多西の郡名は使用されていた。

立から永享の乱が起こつたが、この乱でどのような行動をとつたかは伝えられていない。永享の乱後、武州南一揆は上杉方として活躍していたが、権現山の合戦を最後に史料から姿を消している。権現山の合戦というのは、一五一〇年（永正七）、北条早雲方に寝返つた上田政盛を扇谷上杉朝良が攻め、上田方の権現山城（横浜市神奈川区）を攻め落とした合戦である。以後小田原を本拠とする北条氏の武蔵進出、多摩支配が展開されたが、その過程で武州南一揆は解体、消滅したのであろう。

たのであろう。ただ、銅鐘銘や棟札銘に小宮氏の足跡をみることもができる。



小宮中務憲行、小宮上野介憲明（『大悲願寺過去霊簿』）1461年（寛正2）に小宮中務沙彌憲行が金色山（大悲願寺・あきる野市）に大梵鐘一口を納めたことが記されている。また、1963年（寛正4）6月に小宮上野介憲明が小宮大明神（別当寺は太行寺・あきる野市）の梵鐘一口を鑄たことが記されている。